The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Whitman に於ける南北戦争の意味
Author(s)	大橋, 慶子
Citation	Osaka Literary Review. 1967, 6, p. 73-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Whitmanに於ける南北戦争の意味

大　橋　慶　子

（1）

Literary History of the United States は，南北戦争を内省的に摑んだ，当時に於ける究極の作品として，Whitman の *Drum-Taps* (1865)[1] と Melville の *Battle Pieces* (1866) とを挙げている[2]．しかし，こと Whitman に関する限り，*Drum-Taps* 評価や，彼の詩に対する戦争の意味の評価は，実に多種多様である．Whitman 自身が書簡の中で，"It is in my opinion superior to 'Leaves of grass' —— certainly more perfect as a work of art,[3]" と，この詩集に対する絶大な自信と満足とを表明したり，戦争という，「新らしい，国民的な朗々たる表現のための，突然の，巨大な，恐ろしい，直接的，間接的刺激が与えられなかったら，私の詩作の意図は消滅し，無に帰していただろう[4]」と南北戦争を過度に重要視したことが，事態をより複雑にしているような感無きにしもあらずだが，矢張り筆者は，

> With the exception of "When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd" and one or two of the *Drum Taps* poems, Whitman's verse shows that during and after the war he was living on his literary capital. [5]

とする R. Chase の非常に厳しい見解に，Whitman 理解の正しさを見い出さない訳にはいかない．

そして，詩人自身の見解と客観的（だと思われる）事実とが，かくも大きく隔たっていること事体，非常に興味深いことだが，それと並んで，傑

作を殆んど含んではいなくても，Whitman の戦争詩が実に様々の面を持っていることが，読者の興味をそそるのである．

Whitman は前述の書簡の中で，"the pending action of this *Time & Land we swim in*, with all their large conflicting fluctuation of despair & hope, ……" を，直接的にではない方法で詩に表現しようという彼のアンビションを語っているが，彼の戦争詩は，彼の個性の動的傾向と共に，史上初めての近代戦，総力戦の様相を呈した南北戦争の複雑さを，あからさまに反映していると言える．それは大ざっぱに分けて四つの面を持っている．即ち南北戦争が，アメリカに於ける民主主義の発展上必然的に起らざるを得なかったという大義を軸とした面，地獄絵のような戦争の暗黒描写と戦争の忘却への希求の面，愛と死とのモチーフつなぎが，詩人の抒情的な特性と現実の確実さに支えられて見事に結実した挽歌，そして次の一面である．

戦後 Whitman は，"As a Strong Bird on Pinions Free" への序文で，

> "Leaves of Grass," already publish'd, is, in its intentions, the song of a great composite *democratic individual*, male or female. And following on and amplifying the same purpose, I suppose I have in my mind to run through the chants of this volume, (. . .) the thread-voice, more or less audible, of an aggregated, inseparable, unprecedented, vast, composite, electric *democratic nationality*.

と述べているが，そのテーマが，個性から，「その発展としての」とは言い難いが兎に角，国家像へと移っていること，この問題意識の変化が，Whitman に現われた戦争の第四の面である．

次に，これらを便宜上，戦争描写の推移，挽歌，Whitman の戦争把握と将来への展望，という風に分類して，具体的に考察してゆきたいと思

う．先に結論めいた事を述べておけば，我々の興味の中心は；第一に，Whitman の戦争詩は多くは群小詩に属するが，全体として戦争そのものを反映して，個性を通して見た複雑さを持っていること，第二に，2節で考察する種々の戦争描写の態度は，3節で取扱う，"When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd" 等の優れた挽歌に対する詩人の一つの現実的な精神的，詩的準備となっていること；第三に，2節で考察する詩人の態度の個人的傾斜は，詩人の問題意識の拡大には対応できず，それ故4節で述べるように，戦後の新たな詩の準備とはなり得なかったこと，等である．

（2）

Whitman は "To a Historian" (1860) に於て，過去や外界や集合体としての人間を探求する歴史家に対して，自分は，"treating of him as he is in himself in his own rights, ／ Presenting the pulse of the life that has seldom exhibited itself," と，生きた個々の人格や来たるべき歴史を歌う態度を明らかにしているが，戦争に対する彼のアプローチも同様に，極めて個人的である．そうすることにより，*this Time & Land we swim in* を，極めてナイーヴな形で表現している．

先ず参考までに，戦前の戦争描写を考察しよう．無惨にも虐殺された412人の若者の絶望的な最期の情景を描いた，"Song of Myself" §34，独立戦争当時の海戦が物語られる §35-6は，人間の生命の奪われる様，非情な残酷さを浮彫にしはするが，比較的沈着な気分を持っている．"A Song of Joys" の一節はむしろ，戦争の持つ勇壮，ヒロイズム，人間の持つデモーニッシュな傾向への，楽天的で残虐な憧憬の気分に支配されているが，これも又，ひとごととしか見えないような筆致を感じさせる．他に，

Vivas to those who have fail'd!
And to those whose war-vessels sank in the sea! ⑥

などのように，一つの概念の伝達手段として戦争のイメージが用いられる場合があり，これは，通常の価値観の消滅，或いは価値の平等化を表象する手段として用いられているが，矢張り全く平静である．

戦前に見られる戦争への言及は極めて少数だが，いずれもこのように，第三者的気分に貫かれている．この理由として考えられるのは，後に "For grounds for 'Leaves of Grass,' as a poem, I abandon'd the conventional themes,"[7] と述べた詩人の文学観からして，殊更に戦いのテーマに熱を入れる気持がなかったことに加え，とりわけ詩人の体験が戦争に及んでいないということだろう．

しかし，開戦後はどうだろうか．"Quicksand Years" (1861-2) には，環境の激変によって生じる一種の崩壊感がまざまざと見られる．

> Quicksand years that whirl me I know not whither,
> Your schemes, politics, fail, lines give way, substances
> mock and elude me,

この種の崩壊感は，彼の戦争詩にあってむしろ例外的存在だが，しかし，"When shows break up what but One's-Self is sure?" とか，"With the soul I defy you quicksand years, slipping from under my feet,"[8] と言う時，詩人は彼の最も基本的な態度を明らかにしている．この Soul 乃至 One's-Self は，クエーカーの教義の中心である "the Inner Light, the Divine Spirit within every human being,"[9] や Emerson の Over-Soul との比較に於てしばしば論じられるが，事実この両者の Whitman 的解釈とでも言うべきものである．Whitman はこの Soul を人間の本体とし，肉体によってそれがこの世に形を与えられると考えており，好んで詩に形象化している．彼にとってこの Soul は最後の最後の自己を支えるものであるが，先ずこういった soul を歌ったことは，Melville の戦争詩とは違い，有名な戦場，将軍や戦略戦術には全くと言って良い程無頓着

な，彼の戦争へのアプローチ，Soul とのじかの接触を見せた彼の戦争への取り組みを図らずも予告している．

次の段階で，詩人は，

> but now the drum of war is mine,
> War red war is my song through your streets, O city! ⑩

と戦いを描く者としての自己の立場を明確に位置づけているが，それによって彼は，僅かの時期，種々の方法で戦争を理想化し，人々を戦争の熱で焼き焦がそうとするかのような戦争支持を表明する．

例えば，マンハタンの武装を興奮の調子で歌う．"Give me the splendid silent sun with all his beams full-dazzling," で始まる詩は，人々の波，街路，劇場，顔々々，そして戦争によって惹起された騒々しい活気を求め，熱っぽい戦争支持の宣言となっているが，それは自然への強烈な愛着，憧憬と，Manhattan へのそれとの鋭い対照によって，気負の輝かしさをもたらしている．

又，戦争に種々の意義を与えることによって，それを理想化して歌う．"Song of the Banner at Daybreak" は，夜明けの風の中にはためく星条旗，ドラムの音を各々アメリカ統一の象徴，戦いの象徴として登場させ，demons, slaughter, premature death を口実に，子供を日常性の世界へ引き留めておこうとする父親を配して，戦争に「自由」のイメージ，又俗物的世界からの飛翔の意味を与えている．更に，"Rise O Days from Your Fathomless Deeps" は，

> Hence I will seek no more the food of the northern solitary wilds,
> No more the mountains roam or sail the stormy sea.

と，吹き荒れる暴風，雷電の号音閃光という自然の猛威と平衡させることにより，戦争にエネルギーのイメージを与える試みである．

そして，"I Saw Old General at Bay" では敵陣へ突入するための志願者を暮る情景が描かれるが，詩人は，生命を賭して自主的に戦に参加する兵士達の勇気とその美しさを称えている．同様の詩人の感慨，

> The people, of their own choice, fighting, dying for their own idea, insolently attack'd by the secession-slave power, and its very existence imperil'd.

が *Democratic Vistas* にも見えるが，戦争後期に厭戦気分が蔓延していたことを思えば，この理想化はいささか行過ぎの感を免れない．しかし，兎に角，彼は戦争の初期段階で可能な限りこれを理想化し，支持したのである．

これに関して，我々は，友愛の詩人でもある Whitman が何故こうした戦争の理想化を熱狂的に行ない得たのだろうか，という疑問を持つ．彼が後に志願看護兵として働き，しかも感情的には戦争の悲惨さをしか歌わなかったことと対比してみると，いかにも唐突な印象を受けるからだが，その理由を探るために彼の戦前のものを検討することとしよう．

Leaves of Grass, 1860年版の，"To a president," "To the States" に見られる，歴代大統領の無能無策，政治の腐敗振りへの怒りを伴なった深い嘆き，

> Why reclining, interrogating? why myself and all drowsing?
> What deepening twilight —— scum floating atop of the waters,
> Who are they as bats and night-dogs askant in the capitol?

や，未発表の "Eighteenth Presidency!" [11] によって，我々は，彼がリ

ンカン政府の勝利と成功をアメリカが真に民主主義的な共和国となる唯一の道だと看做した理由を納得することが出来る． Whitman は，リンカンを人間として親密感と称賛のこもった目で見ていたと共に，政治的にも彼と非常に近い見解を示していたようである．[12] 従って，雄々しく武装するマンハタンの歌， "Beat! Beat! Drums!" が， Bull Run の戦で連邦軍が最初の大敗北を喫した際に書かれた事実も，彼の心の苛立ちを無言のうちに説明するものである．

だが，その理由として，更に彼の文学論がこれに一枚加わっていると見ることが出来る．初版で手がけた序文の中で，彼は非常に茫漠たる詩人論を展開しているが，偉大な詩人は seer であり，一般大衆は彼が物言わぬ現実に付着している美や威厳以上のものを示してくれること，現実と彼等の魂との間の道を示してくれることを望んでいる，という風に，現実と魂との架橋という仕事を詩人の最大の任務としている．そして，「偉大な詩人は奇蹟とは無関係だ．彼は大衆の一人であるところに自己の健康さを見る」と，生きた現実から詩の泉を汲み取ろうとする態度を明らかにしている． これは前述の， "the pending action of this *Time & Land we swim in*" へと繋がるが，我々はここで，彼が如何に現実に対して忠実たらんとしているかを知り， 又戦争がそれを許したのを感じる． 但し "if peace is the routine out of him speaks the spirit of peace, ･･･In war he is the most deadly force of the war." という無批判の現実追従の単純さに至っては，我々は唖然としない訳にはゆかないが，しかしその単純さも又 Whitman の戦争時の態度の一端を担っていたと言えるだろう．以上の要素の複合が彼の初期の勇壮な詩の背景となっていると思われる．

しかし，それでも尚，これらの詩中に，人命を奪うことは確実だが，終焉は全く不確実な不測の戦への，一沫の困惑と悲しみの気分を見逃す訳にはゆかない．興奮のるつぼの詩行が，

Year that suddenly sang by the mouth of the round-lipp'd cannon,
I repeat you, hurrying, crashing, sad, distracted year. ⑬

で終っているのを見る時，本質的に陰うつで残酷な戦争に目をそむけ得ない詩人の心を読むような気がする．

かくして，1862年末，Falmouth の実戦場へ赴いて戦争の極悪非道を実見し，後ワシントンで傷病兵の看護に携わる時，現実の苦さを確かめて了った詩人は最早戦争の理想化の詩を歌うことは出来ず，その詩は全く趣の異なった様相を呈することとなる．その悲惨さはむしろ散文の中に感動的に語られているが，文字通りスケッチと言い得る描写の少なくない戦争小品の中にも，血なまぐさい修羅場を剋明に記した印象的な場面がある．

"O the hideous hell, the damned hell of war／Were the preachers preaching of hell?／O there is no hell more damned than this hell of war." ⑭という叫びは「血のり，膿，切断された手足の切口」，血とうめきの充満する野戦病院の情況を見た者の正当な反応であろう．断片的に現われるにすぎないが，感覚器官を総動員した描写は，呪われた地獄にひときわ高い迫真力を与えている．そして，後期には彼の詩は，実質上の戦争の惨禍の描写を行なっている．

回顧的な詩句に，「どっと流れ出した不滅の隊列，先頭を切って前進する軍隊」に踵を接して現われる．

Swarming, trailing on the rear, O you dread accruing army,
O you regiments so piteous, with your mortal diarrhea, with your fever,
O my land's maim'd darlings, with the plenteous bloody bandage and the crutch, ⑮

があるが，これは文字通り，兵士を苦しめた下痢，不具，松葉杖であると同時に，極度に疲幣し，荒廃した国土，又人心を象徴しているようで

ある.

戦後の描写も又,

> Ah soul, the sobs of women, the wounded groaning in agony,
> The hiss and crackle of flames the blacken'd ruins, the embers of cities,
> The dirge and desolation of mankind. ⑯

を始め, 散文の, 「煮えたぎる地獄と暗い悪魔のような背景」, 「彼等の様子は何という悲惨な物語を語っていることか」など, 戦争に関してはそのいたましさ, 地獄模様の印象を常に真正面に持ち出しているが, Whitman にとっては当然すぎる程当然のことだと言える.

更に, 戦後の作と共に, 戦争がテーマとはなっていない旧来の詩に, 戦争関係の挿入を行なったものが多く見受けられるが, それを抜きにしては通過することの出来ない詩人の心理をよく伝えている. "Nor war alone—— thy fearful music-song, wild player, brings every sight of fear,"⑰ 或は, "For the war, the struggle of blood finish'd, wherein, O terrific ideal,"⑱ 或は, "And war itself, with all its horrors,"⑲ と, これらも戦争の恐怖性をあからさまにしている. 又, 昼は殺戮の真只中を無感覚に通過し, 夜は瀕死の負傷者の世にも恐ろしい形相, 死体の山等を夢に見てうなされる告白的様相を帯びた詩があるが, 後めたさを伴った人間心理を素直に取り上げている.

以上, 全く未経験の時期の第三者的気分による描写, 大義のみに見入っていた時期の戦争の理想化と勇壮な描写, 実戦場の血とうめきの中に飛び込んだ時期の, そして戦後の, 惨禍と忘却の願いの描写という分類の下に挽歌を除いた Whitman の戦争小品を考察したが, 我々は戦況及び彼の個人的環境の変化に伴い, それらが明瞭に変化したことを確認し得る. そして彼が自己の精神, 感情に忠実に従ったのは, 彼の詩人論の無意識

的な実践でもあった訳である．これらの小品は，その輝かしさ，リズムの緊張，感受性鋭い迫真力で優れたものを持ちながらも，総じて傑作と言い切れるものはないが，しかしそれを認めながらも我々はそこに生身の人間の持つナイーヴな反応を読み取り，動的な個性の反映に心動かされるのである．

さて，外界との接触によって個性はそれ独自の表現を獲得するものだが，「警鐘を打ち鳴らした」詩と，悲惨な地獄絵との激しいコントラストの外に，友愛の詩人 Whitman の挽歌，「静かに死者を見守った」[20]詩を見ることが出来る．

（3）

戦場では死は現実そのものであった．Whitman は戦争詩に於ても，彼の種々の体験から，愛に満ちた密度の高い詩を他の歌より以上の筆を持って書いている．もっとも，彼の体験が直接に彼の才能に作用してこれらの詩を生み出したのではないだろうし，挽歌の場面は，大気の下，戦場の夜とほぼ限られているが，しかしその背景となるものは矢張り，苦しむ者への詩人の愛，即ち，彼の現実の体験によって証されている愛である．従って今しばらく，抒情詩に於ける愛の要素について考察しよう．

詩人の口を借りれば，[21] この期間に彼は600回以上病院を訪問し，8千乃至1万人の傷病兵を見舞い，そして大半は全く友人知人もなく，退屈な長煩いや悪化する傷の痛みに耐えている．彼は，自分の存在によって，そして普段と変らぬ陽気さと人を引き付ける力によって，彼等を元気づけようと努めるが，母親への書簡には，彼がいかに人間としての兵士を愛しているかが，ありありと窺える．

——there was no help but to take of the leg——
・・・they tried their best to bring him to——

> ・・・Mother, how contmptible all the usual little worldly prides & vanities striving after appearances, seems in the widst of such scenes as these —— such tragedies of soul & body. To see such things & not be able to help them is awful——I feel almost ashamed of being so well & whole.

"The Wound-Dresser" の一節,

> One turns to me his appealing eyes——poor boy! I never knew you,
> Yet I think I could not refuse this moment to die for you, if that would save you.

などは，上記の切迫した情況と符号して始めて，容易に信じない我々読者の心を動かし得ると言えそうである．"A Sight in Camp in the Daybreak Gray and Dim" も又，兵士達への彼の深い愛を土台としている．夜明け方，冷え冷えした新鮮な大気の中を歩いていると，重い毛布にくるまった三つの死体が横たわっており，詩人は顔を覗き込んで一人々々に語りかける．そして三人目の若者に，

> —— I think his face is the face of Christ himself,
> Dead and divine and brother of all, and here again he lies.

とキリストを見る．Whitman はキリストを常に親愛なる兄弟と呼び，そして彼を，"saturate time and eras, that the men and women of races, ages to come, way prove brethren and lovers ・・・"[22]という風に愛の象徴とみなしている．死者の姿の中に彼は同朋への愛のために死んでゆく者を見，それに深く打たれたのである．ここで我々は，詩人の大義の思想と純粋な感情とが愛という形に於いて統一されているのを見る．

戦友のいまわをどうして見捨てることが出来ようぞ，と思わず読者を誘

い込まずにはおかない"Vigil Strange I Kept on the Field One Night"も，その涙も乾ききった悲しみを伝える静かな夜の情景と，美しく繰返される"Vigil"の響きが，悲痛さをかき立てる．この種の詩では，内容形式の一致した高まりが実現されており，その中心となるものは詩人の愛である．上りつつある銀月，青ざめた幻の月，大きく静かな月，の下を進み行く涙ながらの葬列を歌う，"Dirge for Two Veterans"も又詩人の愛の高まりとなって終る．

And my heart, O my soldiers, my veterans,
My heart gives you love.

このように，彼の挽歌の多くは，詩人の個人的体験としての愛と嘆き，特に激しい愛がその軸となっている．暗殺された大統領，リンカンへの哀歌"When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd"もその基調となっている気分は，"the feeling expressed in this poem are exceedingly personal and exceedingly abstract.[29]"と言われるように，リンカンに対する詩人の個人的な愛である．以前の詩の中に，内容，形式共に種々の要素の源を辿ることの出来るこの詩は，又，無限の奥行きと広がりを持つ劇的な構成を有し，言う迄もなくWhitmanの詩のピークの一つであると見ることが出来る．それは枠として，力強い，平明なシンボルを持ち，それらで始まったものが，

Lilac and star and bird twined with the chant of my soul,
There in the fragrant pines and the cedars dusk and dim.

で終るという，一種の自己完結を示している．よく指摘されるが，「早くも西の空に没した偉大な星」はリンカンの，ふくよかに香り，ハート形の濃緑色をした極くありふれた春の自然の申し子ライラックは，リンカンの

悲劇の回想，そして，立ち戻る春毎に新たな息吹を吹き出す生命，愛のシンボルである．又，閑静な奥まった沼で，血のにじんだ声で歌う一人ぼっちのつぐみは，言う迄もなく詩人の兄弟であり，分身である．

暗殺当時の覚え書から仕上げたライラックに関する次の一節，"So the day, as I say, was propitious. Early herbage, early flowers, were out. (I nemember where I was stopping at the time, the season being advanced, there were many lilacs in full bloom……)[26] と，澄み切った西空に大きく上った金星の冴え冴えとした姿を見た時の詩人の感興，

> The western star, Venus, in the earlier hours of evening, as if it had rapport indulgent with humanity, with us Americans.[27]

は，それらが彼の精神の象徴であると同時に，全国民共通のそれであることを明らかにしている．しかし，第三の隠遁のつぐみは，熱烈な愛の故に孤独を一層強く感じる詩人の最も親しい表現形式の一つである．

> Having studied the moching, bird's tones and the flight of the mountain-hawk, And heard at dusk the unrivall'd one, the hermit thrush from the swamp-cedars,[28]

を始め，"Gushes from the throats of birds hide in the foliage of trees"[29] など，以前の詩の中にも我々は鳥の喉を借りた表現を多く見い出すことが出来るが，彼の愛と孤独との不可分の関係を最も端的に表現したものは，"I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing„ である．自己を樫の木に譬えながらも，

> For all that, and though the live-oak glistens there in Louisiana solitary in a wide flat space,

Uttering joyous leaves all its life without a friend a lover near.

到底このような樫の真似は出来ないと感じていたのは詩人自身であった．"When Lilacs" にもこう言った愛と孤独との絡み合いが深い陰を投げかけている．したたるような哀切な響きが，死者に対する愛を，I'll perfume the grave of him I love という形で，又リンカンの面影を彷彿とさせる，and I saw on the rim of the west how full you were of woe, as where you sad orb. という形で，そして彼の周囲の世界への愛を種々の形で表現している．

春の胸の上を，新たに蘇った春の静かな美の中を通過する柩，無数の松明，憂に沈んだ顔や帽子を被った頭の静かな海，街や小道を通過する柩．その描写は詩行自体が我々に長くうねって続く行列を思い起こさせ，又それは，自然への，嘆き悲しむ人々への，詩人の愛のしるしともなっている．更に，死者の奥つきを飾る絵は，農家や街の，農民や，労働者の春の風景であり，それらを輝らし包み込む，壮厳な素晴しい太陽，日，星である．これらも又詩人の，彼の国土へのいとおしみの表われだと言える．

上述のように，この詩は詩人の愛の気持をその主旋律としている．そしてそれは，暗く広がる死と結びつくことによって，彼の優れた挽歌を作り上げている．いわゆる愛と死のテーマ程，感傷的なメロドラマに陥り勝ちのものは無いと言えるが，彼の挽歌が単なるメロドラマからまぬがれているのは，ひとえに，その創造力豊かな表現と，とりわけ緊張した現実を背景に持った愛と死であった，という二因に拠るものだと思う．

次に死のテーマについて考察しよう．死のテーマについては，Whitman は戦前から好んでこれを用いて来た．否むしろ，憧がれの心を抱いて死に詩的表現を与えようと骨折っていたように見受けられる．

I see in you the estuary that enlarges and spreads itself grandly as it pours in the great sea. ⊗

と，彼は生の状態，死の状態を魂の永遠の流れの一相として捕えている．そして "Night on the Prairies" では，あたかも神秘経験を得たかのように，"O I see now that life cannot exhibit all to me, as the day cannot" と叫んでいる．Whitman は戦前には，広大無辺の宇宙の中の単一の個性を主としてテーマとしていたが，

And as to you life I reckon you are the leavings of many deaths,
(No doubt I have died myself ten thousand times before.) ㉙

のように，彼の死も又宇宙に広がり，魂の宇宙的な輪廻として現われている．がしかし，死の詩的形象化は，戦中戦後のそれに比し，より抽象的，夢想的である．恐らくこれは，詩人がまだ，"the hell of war" を目の当りに経験する以前であり，又彼の現実の死からより隔たっていたからであろう．

だが，大きな詩はしばしば死のイメージで完結されている．"Song of Myself" は "So Long!" より遙かに劇的な展開を見せるが，共に，"disembodied, triumphant, dead"のイメージで終っており，野性的で自由奔放な印象を与えている．

I depart as air, I share my white locks at the runaway sun,
I effuse my flesh in eddies, and drift it in lacy jags.

これらのものに比べれば，戦中戦後の死のイメージは，内容的にはこれらの継承ではあるが，いささか効果の貧弱さをまぬがれない．

"Pensive on Her Dead Gazing" に於て，総ての母なる国土の精は，絶望の眼(まなこ)で，引きちぎれた人間の体，戦場を覆う無惨な姿を見詰め，愁いに沈んだ声で大地に呼びかける．

Absorb them well O my earth, she cried, I charge you
lose not my sons, lose not an atom,
And you streams absorb them well, taking their dear blood,

これは，Hamlet 始め他の詩にも見られ，肉体が土に帰りその成分が化学変化によって植物を開花させ，こういう風にして新たな生命へと連綿と受け継がれてゆくという，G. W. Allen の言う物理的汎神論である．"Ashes of Soldiers" たなると，これに兵士達への詩人の愛が加わり，

Make these ashes to nourish and blossom,
O love, solve all, fructify all with the last chemistry.

となる．

しかし勿論，「霊的汎神論」が多く歌われていることは言う迄もない．"How solemn as One by One" では，疲幣し，汗みどろになって帰還する連隊の兵士達の顔の背後に，詩人は類的に繋がっている一つの魂を見い出す．

O the bullet could never kill what you really are, dear
friend,
Not the bayonet stab what you really are;

この「真の汝」とは，Whitman の見解に従えば，2節で触れたように，永遠に存在してはいるが，肉体を与えられることにより初めて形態を得る人間の本体である．

ところで，病院時代のノートブックの中の一つの詩は，彼の魂についてのヴィジョンを知るのにふさわしい．蜘蛛が幾度も糸を吐き出すことによって他との連繋を計ろうとするように，愛を求めて奮闘する魂を描き，

For then I thought of you oer the world
O latent oceans, fathomless oceans of love!
O waiting oceans of love! yearning and fevid! and of you
sweet souls perhaps in the future, delicious and long:[30]

と記されているが，この場合 souls of love は愛の大海として，丁度大気が地球を取り巻くように，この世を取り巻いている．souls of love のイメージは oceans of love のそれと一つものであり，この豊かな，しかしこの世のものでなく未来に属する Ocean は又，死をも包含している．

"When Lilacs Last" は，次第に三つのシンボル，そして歌い手，の間の緊張を高めながら "sane and sacred death" への壮大な賛歌となるが，これも又無限にこの世を取り巻くものとしての死を，小鳥の喉を借りて歌っている．

Come lovely and soothing death,
Undulate round the world, serenely arriving, arriving,

こう言った死の解釈は戦前には見られはなかった一つの領域の拡大である．さらに，

Approach strong deliveress,
When it is so, when you hast taken them I joyously sing the dead,

と，ここでは，死が「救出者」即ち，現実の苦しみ，困難から逃れ出る道として描かれるが，これも又，戦場の修羅場を見て初めて感動的に歌い得る，死のイメージの領域の拡大である．これに続く節で更に，戦闘旗が乱立し，砲が飛ぶ煙の渦の中の戦場の悲惨な情景の無言の映像をカメラの目のように捕えることにより，"They themselves were fully at rest, they suffer'd not" という，兵士達への追悼を正当なものとし，しかも，"The living remain'd and suffer'd, the mother suffer'd," と残され

た者達の苦しみを，確実な嘆きを持って際立たせるのである．

戦後の死について明白に言えることは，死のイメージが疑いなく詩人のイメージと，現実感を持って合致していることである．"Prayer of Columbus," "Thou Mother with Thy Equal Brood" に於て，死につつある Columbus，森の精は詩人を表象しているし，又

> Let me glide noiselessly forth ;
> With the key of softness unlock the locks——with a whisper,
> Set ope the doors O soul. [31]

と自身死を眼前に見る者の目で死が歌われている．このように，同じ死についても，戦前では殆んど直感的に，思想の一環として，発見されたものとして歌われているが，戦後それは完全に彼の一部となり，従ってより具体的，より現実的になっている．そしてその中間にあって，無名の英雄達への，又偉大な大統領への挽歌では，非常にリアルな現実に根を張り，しかも彼独特の愛と，死の思想の神秘的傾向とが，巧みな均衡を見せているのである．

（4）

現実そのものであり，詩人もその中の一人として生きていた戦争は，戦後になると，彼がそれを解釈し，現在将来への方向を探るための対象としての性格を帯びて来る．人間は人生を戦や旅に譬えるのが常であり，Whitman も戦前には "Song of the Open Road" 等で戦のテーマを比喩的に用いていたが，戦が終ると再びそれが前面に現われてくる．

最も興味深い現われは，傑作ではないが，"Chanting the Square Deific" であろう．四面の神性の第三面について，G. W. Allen は「神か悪魔への抵抗」，T. E. Miller は「サタン」と説明しているが，矢張りこれは，永遠に悪は立ち現われるものだという確信に裏付けられた内容を持

っているように思われる.

> Defiant, I, Satan, still live, still utter words, in new lands duly appearing, (and old ones also,)
> Permanent here from my side, warlike, equal with any, real as any,

以前から悪の存在を常に歌ってはいたが，しかし，アメリカにも戦争が起らざるを得なかったという厳粛な事実は，時代に応じてその時代特有の現われ方をする悪の存在に対する詩人の意識を高めたのであろう．この認識は当然のことではあるが，又真実でもある．

さて，戦争によってWhitmanは祖国アメリカを彼なりに，大義に添ってより理論的に考え始めていた．もっとも彼は終生アメリカの無際限の可能性を信じ，豊かな国土を愛したが，戦前は国としてではなく，個としての人間の宇宙的な広がりの一端としてアメリカを把握していたと言える．

Drum-Taps にもそのようなアメリカへの関心はありありと現われている．白髪を振り乱し，嘆き悲しみながら夫や子供の墓にうずくまっている女性，アイルランドの女王に呼びかけ，「汝の愛している息子は真に死んだのではなく」，「汝が泣き求めているものは，変化し，墓を通り過ぎ」

> And now in rosy and new blood,
> Moves today in a new country.

と歌う時，彼は単なる「物理的汎神論」ばかりでなく，人間理想が旧大陸から新大陸へ継承されているという自信を歌っているに外ならない．更に，彼のアメリカへの期待は，魂の輪廻，人類の理想の継承という意識に支えられたそれであり，単なる排他的愛国心でないことは明らかである．

広大で肥沃な国土のイメージを持った多産なアメリカの描写で始まる "Return of the Heroes" は，国土に対する愛に満ちたものだが，それ

は又アメリカの戦後の再建への期待でもある．「戦争」の役割は

> Melt, melt away ye armies —— disperse ye blue clad soldiers,
> With saner wars, sweet wars, life-giving wars. [29]

と，完全に生産への戦というイメージに変化している．こういった転換は特に Whitman にとって興味ある問題だったようである．それは，兵士の行進，軍鼓の響きから，畑での収穫への転換であるばかりでなく，封建的遺物から民主主義的文化への転換であり，「王や奴隷やカーストの勝利した世界」から「勝利が保留され，そしてやって来る世界」[30]への転換である．

戦後，詩人は戦争を，「民主主義の陣痛のうめき」であると解釈している．戦後大々的に手を加えられた作品 "By Blue Ontario's Shore" では，詩人は戦争を民主主義実現の一過程として捕えている．戦争中にも常に民主主義の不滅の子供達が生まれつつあったという認識の下に Democracy を歌い，戦争を裏面から説明する．

> Democracy, the destin'd conqueros, yet trecherous lip-smiles everywhere,
> And death and infidelity at every step.

これは戦中アメリカ統一を唯一の理想としていた彼の，戦後の喜こびの感情をも含めて，Democracy 実現が不断の過程であるという正当な認識の上に歌われている．

そして統一の喜こびの歌の多い中で，無限の空中を自由に飛翔するおさどりへの力強い歌にも，一見それらしくは見えないが，彼のアメリカのイメージが背後にあることは疑えない．夜中吹き荒れる大嵐は戦争その他の諸弊害を象徴し，おさどりの巨大な翼は強力な推進力を授けられたアメリカの発展を象徴しているように思われる．

しかし現実のアメリカでは，南北戦争によって南部を打倒した北部工業

資本が急速に強大化し，それと共に資本主義の内包する諸矛盾が本格的な姿をとって爆発しつつあった．Whitman はこの社会の内にあって，その金権第一主義に代表される文化面での荒廃を機敏に感じ取り，度々それを嘆き批判している．「我国の基本原則が衷心から信じられていない」或は，物質的繁栄は精神的向上の基礎を形成するものであるから大いに喜ぶべきだという観点に立ちながら，

> It is as if we were somehow being endow'd with a vast and more and more thoroughly appointed body, and then left with little or no soul. ⑭

と，その魂の影の薄さに愕然としている．

事実，"Song of the Exposition," "Thou Mother with Thy Equal Blood," "Song of the Redwood-Tree" などの後作は，アメリカとその国土への深い愛に支えられており，全くパラドクシカルではあるが，「Whitman の最も愛国的な詩は多くの者を絶望に陥れたこの時期に書かれたのである．」⑮

> *But come from Nature's long and harmless throes, peacefully builded thence,*
>
> . . .
>
> *You promis'd long, we pledge, we dedicate.* ⑯

と詩人は惜しげもなく新たな帝国への忠誠をうたう．しかし彼が産業の誇示のチャンピオンである博覧会に寄せる歌でテーマとしたものが，ギリシャやイオニアからガウンの絹づれの音と共にやって来るミューズであり，「詩のため，芸術のためのテーマ」であったということは，彼が地に落ちたと信じているアメリカの魂を回復させるための苦しい期待の反映であると同時に，彼の現実認識の分裂の反映でもあると言える．

1節で触れたように，“Thou Mother with thy equal blood, ／Thou varid chain of different States, yet one identity only,” という風に，彼のテーマは，democratic personality より democratic nationality に移行したが，彼の思考方法は相変らず個性を歌う際のそれであり，人格主義であった．2節で考察したような，戦争の理想描写から悲惨描写への見事な変身とは，問題の質が全面的に異なっていることは言う迄もない．彼は，現実の矛盾がどこに原因し，如何なる発展法則の上に現われているのかと吟味することの出来ぬまま personality の理想像をそのまま nationality のそれへと移行させ，従って，以前は，“Song of Myself” など，創造の才によると同時に場合によってはそれ自体正当な価値を持ち得た神秘的傾向を，更に神秘的に，空想的に，非現実的に詩として表現せざるを得なくなって了った．

The soul its destinies, the real real,
Thou globe of globes! ⑦

等の言葉の積み重ねも，我々の心と触れることは最早不可能である．

このような，主要テーマの発展或は拡大に伴う思考方法の発展の欠如が Whitman 後期の特性だと言える．彼は個人的，主観的にしか戦争を捕え得なかった．しかしこれは彼の持つ一つの欠陥であると同時に，彼が如何に時代の矛盾を明日に反映じていたかをも表わしている．戦後彼は，一方で国土や労働者や市民を深く愛し称え，友愛が全人を結びつけるという好ましい理念を持ちながら，一方で真の批判精神に欠け，深く神秘宗教の方へと入ってゆかざるを得なかったからである．この意味で，戦争は「人間としての Whitman にとっては救世主であったが，詩人としての彼にとっては最後の審判であった⑧」とは穿った評言である．

しかし，戦前からの詩的才能が，戦中の具体的経験によって花咲いた “When Lilacs Last” を見る時，彼を「戦前の詩人」⑨と言い切って了う

ことは出来ない．彼の個性が，戦前社会の中で活動する人間に悠々たる表現を与え得たのに反し，2節で考察したそのナイヴィテでもっては，最早戦後の社会に正しい表現を与え得なかったこと，即ち彼の戦争詩が後期の作へと効果的に発展し得なかったことを考えると，彼を「戦争に因って最盛期を終った詩人」とこそ呼ぶのがふさわしいように思われる．

註

註は最小限度に止めた．

① *Sequel to Drum-Taps* (1865—6) をも含めていると思われる．

② *Literary History of the United States*, ed, Spiller, Thorp, Thonson, Canby, Ludwig, 1953, p. 571.

③ *The Correspondence of Walt Whitman*, VOI. 1, ed. E. H. Miller, pp. 246—7.

*④ *A Backward Glance O'er Travel'd Roads*, pp. 553—4.

⑤ Richard Chase, *Walt Whitman Reconsidered*, 1955, p. 133.

⑥ "Song of Myself", § 18, ll. 367—8.

*⑦ *A Backward Glance O'er Travel'd Roads*, p. 547.

⑧ *Walt Whitman & the Civil war*, ed, Charles I, Glicksberg, p. 126.

⑨ *Americana*, Friends, The Religious Society of,

⑩ "City of Ships", ll. 16—17.

⑪ これは，議会，大統領が傲慢に人民に押しつけた，所謂逃亡奴隷法に関して，その憲法への抵触を指摘し， And is all times to be defied in all parts of These States, ••• by speech, by men, and if need be, by the bullet and the sward, と述べている．

Walt whitman's Workshop, ed. C. T. Furness, 1964, p. 109.

⑫ V. W. Brooks, *The Times of Melville and Whitman*, 1947, p. 231.

⑬ "Eighteen Sixty-One," ll, 15—16.

⑭ *Walt Whitman the Civil Mar*, p. 123.

⑮ "*The Return of the* Heroes,"ll 51—53.

⑯ "Prond Music of the Storm,"ll 26—28.

⑰ "The Mystic Trampeter," l47.

⑱ "As I Walk These Broad Majestic Days," l. 2, 1870年に追加された．

⑲ "Thoughts," l. 14, 1870年に追加された．

⑳ "The Wound-Dresser" ll. 4—6. より

*㉑ *Specimen Days*, pp. 632, 585, 591.

㉒ "To Him That Was Crucified," l. 13.

㉓ R. Chase, *op. cit.*, p. 140.

㉔ *Death of Abraham Lincoln*, ed. R. P. Basler, p. 6.

㉕ F. O. Matthiessen, *American Renaissance*, p. 619. より引用.

㉖ "Starting from Paumanok," ll. 12—13.

㉗ "Roots and Leaves Themselves Alone," l. 4.

㉘ "To Old Age", l. 1.

㉙ "Song of Myself," § 49, ll. 1297—8.

㉚ G. W. Allen, *The Solitary Singer*, 1955, p. 342. より引用

㉛ "The Last Invocation," ll. 5—7.

㉜ "The Return of the Heroes," ll. 82, 85.

㉝ "Turn O Libertad" より

*㉞ *Democra Vistas*, p. 468.

㉟ V. W. Brooks, op. cit., p. 256.

㊱ "Song of the Redwood-Tree," ll. 51, 54.

㊲ "Thou Mother with Thy Equal Brood," ll. 213. 216.

㊳ R. Chase, *op. cit.*, p. 149.

㊴ *Ibid.*, p. 15.

＊は *Leaves of Grass and Selected Prose by Walt Whitman*, ed. T. Kouwenhoven, The Modern Library, New york, 1950 のページ数を示す.